

農村民泊を探る

大分県 宇佐市安心院町

(うさしあじむまち)

実施期間：3月12～19日
参加者数：3人

由布院の北側に位置する盆地でブドウの産地でもあり、美しい農村風景が残っている。グリーン・ツーリズムの先進地として全国に知られ、農村全体を楽しんでほしいという願いを込めて、農家民宿を「農村民泊」と呼んでいる。



民泊のイトコを発表

研修生3人は安心院に初めて入った。「7泊8日」の日程で、連続して民泊にお世話になった。民泊7軒に泊まり、うち6軒は新規受け入れ家庭だった。そこで、3人は「今後ぜひ頑張ってほしい」という気持ちを込めて「イトコ発表」を行った。実際に泊まった民泊先の人を前に、自分たちが感じた夫婦の人物や特技、家そのものの魅

力を発表した。3人はそれぞれの視点で自分の意見を述べた。

例えば、岡村さん宅。「自給自足に積極的に取り組み、人のかかり合いを大切にしている」お母さんと、2年半をかけて自宅と庭を設計・建築し「笑顔を絶やさない」お父さんの魅力に触れた。また、荒尾さん宅の「おウチの魅力」では「家の裏に自然いっぱい、山を持っている。台所用に山の水（源流）もひいてる」とし、周辺の自然と共生

している面を取り上げた。

古里以上に 安心院のことを知った

研修生自身も、いろんなことを学んだ。「グリーン・ツーリズムを詳しく知らなかった」という西浦実紗さんは「民泊をしている人は温かく、今の生活を心から楽しんでいることが伝わってきた。ただ旅館に泊まるのとはひと味違う、人との触れ合いがよかつ

た」と感想を述べた。

安心院の農村民泊として登録している受け入れ家庭は50軒だが、常時受け入れているのは17軒。今回の新規の受け入れ家庭に対し、研修生3人は粋なプレゼントを贈った。道山加奈子さんによる直筆のイラストで、なんと「屋号」を提案したのだ。室内の柱や置き時計にロマンを感じたという。「自分の古里以上に安心院のことを知った気がする。また来たい」



椎茸の収穫に取り組む研修生。まずは農家の暮らしから学んだ



7日間連続で民泊。体力的にはハードだったが、民泊の魅力に触れた



道山さんが描いたイラスト



民泊先で出た手作りのうどんは絶品

安心院の魅力を知るため、各地を歩いた研修生



民泊では、火をおこすのも大事な役目



旬の野菜を使った料理の数々

